

## 第四輯 大震災の艱難と残照

### 論文第四

#### 震災後の名歌手ラーフと

#### モーツアルトの歌劇『イドメネオ』

第一節 リスボン大地震の余波とレオポルド・モーツアルト一家

第二節 テノール歌手ラーフの名声とイベリア半島での動静

第三節 モーツアルトのマンハイム・パリ旅行と宮廷歌手ラーフの支援

第四節 モーツアルトの歌劇『イドメネオ』の作曲と主役ラーフの歌唱

レオポルド・モーツアルト 一七七八年八月二一日付神父マルティーニ宛書簡

愚息は昨年三月二三日母親とともにパリへ着きました。ラーフ様もまもなくそこへ来られ、旧交を暖めたのです。ヴォルフガングに会うため彼はほとんど毎日来訪され、二時間から三時間一緒に過ごし、愚妻をこ母堂と呼んで頂きました。そして、愚息が選帝侯のお抱えになれば、最高に嬉しいと申されました。しかるになんたる悲劇でしょう。運命の導きによって最愛なる妻が病に倒れ、二週後にこの世を去りました。神よ！なんとたる不幸でしょう。ふかく敬愛する尊師様！小生と愚娘の有様、またパリで孤独と悲哀に沈むヴォルフガングの有様をご推察ください。選帝侯が一旦マンハイムへ戻られたので、懇請のためラーフはパリからそこへ出立しました。離れる際に彼は愚息への篤き友情と強い支援を確約され、マルティーニ様から直々の推薦状を頂くことが肝要と申されました。

## 第一節 リスボン大地震の余波とレオポルド・モーツアルト一家

一七五五年万聖節の巨大地震はザルツブルクの音楽家レオポルド・モーツアルトにも、一抹の動揺を及ぼした。当地での震動は感知されぬ程度であったが、レオポルドがとくに不安を抱いたのは、妻アンアン・マリアの胎中に息子ヴォルフガング・アマデウスが宿るからである。地震の衝撃を受けると、妊婦は早産しやすい、との俗信がヨーロッパには存したらしい。広く親しまれる知られる器楽曲『櫓乗り』<sup>そり</sup>をこの年作曲した彼は、主著『ヴァイオリン奏法』の印刷についてアウグスブルクの印刷業者ルターと折衝を重ねていた。リスボン大地震とモーツアルト生誕に係わる記述として、ルターに宛てた一連の書簡を抄訳する。

レオポルド・モーツアルト 一七五五年十二月十五日付書簡

宛先 アウグスブルグ、ヨハン・ヤコブ・ロッター 発信 ザルツブルク

・・・最愛の奥様がまもなく出産の重荷から無事解放され、嬉しくも元気なお姿に戻られることを祈ります。貴家の慶福を同じく祈るわが妻も、そうした難行を明年一月末に控えています・・・

レオポルド・モーツアルト 一七五五年十二月二十九日付書簡

宛先 アウグスブルグ、ヨハン・ヤコブ・ロッター 発信 ザルツブルク

親愛なるわが友へ！

新しき年を慶賀し、誕生されたご子息のご多幸を祈る！

奥様が予定より早く出産の重荷を無事降ろされたことを、わが妻とともに喜び申し上げます。アウグスブルグにおける地震の衝撃がおそらく早産の原因でしょう。驚倒すると早産しやすいと、一般に申します。どんな地震だったのですか。ザルツブルクでの情報ですが、ミュンヘン、アウグスブルグ、インゴルシュタット、そのほか各地が揺れたようです。酔人が川に落ちたかも、寝台から放り出された男が、脇机で頭を打ったかも知れません。ここではいまだ地震が生じません。神意に感謝しています・・・

レオポルド・モーツアルト 一七五六年二月九日付書簡

宛先 アウグスブルグ、ヨハン・ヤコブ・ロッター 発信 ザルツブルク

・・・ここに書き添えますが、一月二七日夕八時頃にわが妻は男の子を無事出産致しました。ただし、産後処置が必要となり、そのためかなり衰弱しました。神の恵みにより、いまは母子とも元気です。貴殿によくお伝えください、と彼女は申します。この子をヨアネス・クリソストムス・ヴォルフガング・ゴットリーブと名付けました・・・<sup>①</sup>

リスボン大地震の八八日後呱呱の声を挙げたヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトは、三歳ときからチェンバロを奏し、五歳にして作曲を始めた。やがて父レオポルドの同伴でドイツ各地への旅行に出立し、ベルギーとフランスを経て一七六四年ロンドンに到着する。ここでは英国国王ジョージ三世に謁見を賜り、六

① Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*, Kassel, 1962. Band I, SS.23, 27, 33-34.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』白水社、一九六七年。第一巻、一〇一―一五頁。

曲のソナタを王妃シャルロットに献呈した。交響曲の作曲や演奏会の開催を重ねる一方、八歳のモーツアルトは当地の指導的音楽家ヨハン・クリスティアン・バッハに啓発され、カストラート歌手ジヨバンニ・マンツォーリの厚誼と指導をうける。前稿で述べたとおり、この歌手こそポルトガルでの歌劇場柿落ししけりに出演し、リスボン大地震に遭遇したひとりである。一七六四―一七六五年度の国王劇場公演に招請され、そこでの盛況をレオポルドは羨望をもって書き残した。①

一七六九年から始まる長期のイタリア旅行でモーツアルト父子は、フィレンチェにおいてマンツォーリと再会し、さらにミラノとナポリで評判のカストラート歌手、ジュゼッペ・アプリーレのオペラ出演を観劇する。② 一七五三年ナポリでデビューしたアプリーレは、五年後にマドリッド宮廷へ招請され、リスボン大地震の翌年アランジュエズ宮においてコンフォルト作曲の歌劇『天才の力』をテノール歌手ラーフと共演した。ポルトガル王妃のマリアナ・ヴィットリアの異母兄、フェルディナンド六世が臨席した最後の舞台である。

レオポルド・モーツアルトの一七七〇年三月二七付書簡は、ボローニャ近郊でのファリネリ訪問を誌す。イタリアへ帰国し、ナポリで熱烈な歓迎を受けたあと、一七六一年から閑静な別荘に隠棲したのである。革新的な作曲家グルックは一七六三年に、またオーストリア皇帝ヨゼフ二世は一七六九年にこの山房へ来訪した。また、『十八世紀音楽史』の著者シャルル・ブルネイが数度の会見を懇請し、ファリネリの回想を筆記した。しかし、モーツアルト父子との会話がどのようなものであり、その席で天上の歌声を聴けたか否かは詳らかでない。③

やがて一七七七年二一歳にしてすでに二八〇余曲の業績を果たしたヴォルフガング・アマデウスは、ザルツブルク大司教座宮廷音楽家の職務を離れ、母親マリア・アンナとともにいわゆるマンハイム⇄パリ旅行に出立した。長旅の主要な目的は各地で作曲と演奏を披露して名声を高めるとともに、いずれかの宮廷で専属音楽家として任用されることである。旅の初めにモーツアルト母子は、まずにミュンヘンで十八日間、ついでアウグスブルクに十五日間滞在し、貴族の館等で演奏会を重ねたが、宮廷音楽家としての仕官は不首尾であった。④ こうしたわが子アマデウスに、レオポルドはつぎの旅先マンハイムに期待を寄せ、とくに信頼できる名士としてアントン・ラーフを推挙し、尊敬すべきこの名歌手に支援を仰ぐよう助言する。

### レオポルド・モーツアルト 一七七七年十月十八日付書簡

宛先 アウグスブルグ滞在ヴォルフガング・アマデウス 発信 ザルツブルク

・・・そなたがマンハイムへ着いて、全幅に信頼できる著名人はラーフ殿であろう。この方は信仰に篤く、尊敬すべき人物で、同胞たるドイツ人を愛し、そなたに多大の助言や支援をされると思う。ラーフ殿のご尽力で、どうか選帝侯への拝謁と冬期の滞在が許され、そなたが真価を発揮できる機会を得られるようにと念じる。この方が最良の助言をされるであろうし、そなたも内密な相談ができるよう信頼を得ねばならぬ。ヴァイオリン奏者のダンナー殿は私の旧友で懇意な間柄であり、喜んで案内されるであろうが、自身の計画をラーフ殿以外にはだれにも漏らしてはならぬ。⑤

① 海老沢敏著『モーツアルトの生涯』白水社、一九八四年。六九頁。

海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第一巻、二〇四、二〇六頁。

② 同書、第二巻、六一、六三、一四五頁。

③ 同書、第二巻、九一頁。

④ 海老沢敏著、前掲、二一六―二一九頁。

⑤ Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*, Kassel, 1962. Band I, SS.23, 27, 33-34.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第一巻、一〇―十五頁。

## 第二節 テノール歌手ラーフの名声とイベリア半島での動静

マンハイムを訪れるモーツァルトが、全幅に信頼できる名士として父レオポルトから推挙されたのは、やがて十八世紀最高のテノールと讃えられる声楽家アントン・ラーフである。一七五五年三月ポルトガルにおいてテエージョ新劇場柿落しの主役を演じたあと、彼は十一月に勃発したリスボン大地震の被災を免れた。この僥倖を天に感謝すべく、ラーフは故郷のボン選帝侯領に礼拝堂を寄進する。一九九四年に執筆されたアロイス・ヴォルフガング・アルボガストの小伝『テノール歌手アントン・ラーフ―ヘルチエン・ネポムク礼拝堂の再建者』には同礼拝堂の由来とともにラーフの略伝が記載される。以下ラーフの経歴については主としてこの論文を参照する。一七一四年この名歌手はライン河流域の都市ゲルスドルフで出生し、まもなくその一家は近くの村落ホルチエン（現在の地名はヴァートベルク）へ移転した。ゲルスドルフとホルチエンはケルン大司教の所領にあり、ともにボン南方の近郊に位置する。①

ホルチエン村南端の聖ヨハネス・ネポムク礼拝堂は設立二五〇年をいまや（一九九四年）迎える。その門口上部の梁には一七四四年と刻まれるからである。

三位一体なる神と聖ヨハネス・ネポムクを祀るべく慈善家がこの建築を造営した。門口に示された朱色のローマ数字は建造の年を意味するであろう。他方礼拝堂にはアントン・ラーフ広場と呼ばれる前庭が備わる。ときには教会自体がアントン・ラーフ礼拝堂とも呼ばれる。これなる人名と建築の関連を明らかにするのが、本稿の課題である。〔中略〕

ラーフの父親はグドナウ城の管理人であったようで、おそらく一定の資産を有し、ボンにあるイエスズ会のギムナジウムへ息子を入学させる。一七二六年の文書には第三学級の生徒アントン・ラーフがイエスズ会演劇の楽団員として記録される。この年彼は聖職者の道に入る希望を示し、のちのちまでそれを棄てなかった。〔中略〕著名な声楽家ラーフが二十歳にして初めて専門的な修業に入り、歌曲やアリアを学んだことはよく知られている。いくつかの演奏会で彼が歌い、ボン宮廷に伝わるまでになった。やがてケルン選帝侯クレメンス・アウグストが聴きに来られ、その美声に感嘆する。一七三六年にはボン宮廷でイタリア・オラトリオが上演され、若きラーフの歌唱が絶大な喝采を博した。この年同宮廷から彼が供された年俸は二〇〇フローリンである。②

さらにラーフ一七三七年ババリア選帝侯にも招かれ、謝肉祭の公演においてオペラ歌手として最初の成功を収める。まもなくクレメンス・アウグストの支援によつて彼はイタリアに留学し、著名なカストラート歌手アントニオ・マリア・ベルナッチの薫陶を受ける。以後彼はポローニア、フローレンス、ヴェネチアで喝采を博し、一七四二年からボン宮廷に復帰した。一七四九年神聖ローマ皇帝主宰の祭典としてウイーンにおいてナポリ人製作のオペラ三つが企画され、作曲家ニコロ・ヨンメツリはボン第一のテノール、ラーフ登用によつて絶大な成功を収め、以後両者は友誼で結ばれる。翌年ラーフはトリノにおけるサヴォワ公家婚礼祝賀の歌劇に出演し、さらに一七五一年パドヴァ新劇場の柿落しにも登場した。

一七五〇年に即位したポルトガル国王ジョゼ一世は宮廷音楽の振興を念願とし、ローマ駐在の大使を介して国務尚書カルヴァリョ・エ・メロが、ジツイエロやラーフなど著名歌手の招聘を調べた。年俸二〇〇フローリンの契約を

① Alois Wolfgang Arbogast, *Der Tenor Anton Raaff (1714-1797), der Erbauer der Nepomuk-Kapelle im Holzem.*

*Heimatblätter des Rein-Sieg-Kreises* 63, Jahrgang 1995. S.165.

② *Ibid.*, SS.165-166.

結んだラーフは、一七五二年リスボンに到着した。同年九月十二日レイラ王宮西側に新設されたテアトロ・ド・フォルテにおいてメタスタシオの脚本、ダヴィッド・ペレーズによる歌劇『ペルシャ王シロエ』の初演が行われ、彼はジツイエロ、ガリエニ、ルシアニらと共演する。以後彼は翌年謝肉祭における歌劇『見捨てられたディオーネ』をはじめいくつの舞台に登場するが、一七五五年テージョ歌劇場柿落しとリスボン大地震に至る経過は、アルボガストによる小伝でつぎのように記述される。①

一七五二年ポルトガル国王の招請に応じ、ラーフはリスボンに着いた。この都会における三カ年の輝かしい活躍は、新たに招かれたナポリ人ペレーズによって作曲され、宮廷劇場で上演される三つのオペラから始った。とはいえ、同行する友人の悲劇的な自殺を遂げたために数カ月彼は沈痛な様子にあった。一七五五年四月二日テージョ新歌劇場が開幕し、これに接した外国人観客はヨーロッパでもっとも豪華な劇場と評判を広げた。柿落しは、(宮廷作曲家)ペレーズによる『インドにおけるアキキサンドル大王』であって、ラーフが主役のひとつを担った。彼の歌唱はまさしく黄金の輝きであった。だが、七カ月後の一七五五年十一月一日凄惨な地震によって隣接の王宮、壮大な建造物が壊滅する。つとに八月ラーフはマドリッドへ移っていたが、彼が滞在した宿舎をも巨大地震は破壊した。古文書によれば、幸運にも被災を免れたことを名歌手は天に感謝し、一七五六年ホルチェンにネポムク礼拝堂を建立したのである。ただし、この年歴は礼拝堂門口の銘文と合致しない。②

ちなみに大地震を契機としてラーフの寄進によりネポムク礼拝堂の建築が実施された時期については、これなるアルボガストの論文によってもなお決着できず、考証上の微妙な問題が伏在する。礼拝堂の銘文が誤りとしても、震災直後の一七五六年ラーフは、他の被災音楽家とともにマドリッドに止まらずにはずである。この時点でドイツにおける礼拝堂の寄進と建造再建がどのように行われたか疑問である。

さて、スペイン宮廷の招請によって大地震の三カ月前にマドリッドに到着したラーフは、九月三日国王フェルディナンド六世の生誕記念日にビエン・レティロ宮廷劇場で真価を發揮した。この日上演されたのはやはりメタスタシオの台本による歌劇『デモフォオンテ』であって、ソプラノ歌手カステリーニやカストラート歌手マンゾーリとの共演である。

スペインの王都においてテノールの名歌手ラーフは著名なカストラート歌手カルロ・ブロッシ、すなわちファリネリと一緒にになった。ファリネリはスペインの劇場を革新し、マドリッド近郊の離宮ブエン・レティロに輝かしいオペラを開花させた。彼はこうした宮廷芸術の総監督であるとともに、声楽家として稀有な才能を病身のフィリッペ五世とその後継者フェルディナンド六世にもつばら捧げていた。ラーフもスペインで優遇されて、快適な日々を過ごし、舞台での活躍は多大の称讃を博す。余暇にはスペイン語を学び、セルヴァンテス著『ドン・キホーテ』を読んだとされる。出演した歌劇としてはヴィンチ作曲『捨てられたディドーネ』が挙げられる。一七五九年フェルディナンド六世は逝去し、カルロ三世が即位するや、ファリネリは国外への退去を命じられる。これに同行してラーフも歌劇の都ナポリへ帰り、一七七〇年までサン・カルロ劇場で歌い続けた。

イタルアへ帰国したラーフは、ナポリのサンカルロ劇場を拠点として一七六〇年から一七七〇年まで活躍する。この時期に歌劇『ウティカのカトー』や『インドのアレクサンダー』の初演で主役を担い、作曲者であるヨハン・クリ

① *Ibid.*, S.166.

② Arbogast, op.cit., SS.166-167.

ステイアン・バッハ（大バッハの十一男）と親交を結んだ。さらに彼はイタリア各地へ演奏旅行を繰返し、ポローニアで隠棲せるファリネリを訪ね、ローマでは教皇より黄金拍車勲章を授与された。

メスタシオの脚本にヨンメツリが作曲を付した歌劇『執政官アティリウス・レグルス』がナポリで初演されたのは、一七六一年三月二三日である。十二年前ウイーンでの初舞台からその清澄な歌唱を称讃するメスタシオは、この企画に一抹の危惧を抱いていた。一七三〇年国王カルロス三世によって建造されたサン・カルロ劇場が、あまりに壮大であることも不安のひとつである。膨大なメスタシオ書簡集の編纂者であるバーネイの解説とともに、『執政官アティリウス・レグルス』公演をめぐる台本作者自身の思惑を訳出する。①

#### チャールズ・ブルネイ編著『故メスタシオの生涯と文書』

つぎの書簡は日付を有しないが、『執政官アティリウス・レグルス』が初めてナポリで公演された一七五一年（ママ）におそらく書かれた。初期からのパトロン、デルモンテ公妃へ宛てた同書簡において、メスタシオはこの歌劇の成功を信じる彼女の楽観的な期待を制御している。……

#### メスタシオ デルモンテ公妃宛書簡（日付不明）

歌劇『執政官アティリウス・レグルス』は誇りうる自作であり、親愛なるラーフは比類なき歌手であります。しかし、これら双方は相性が悪く、組み合わせると、共倒れになります。すなわち、レグルスを演じれば、哀れにもラーフは失敗し、主役のみならず歌劇自体が誤算となるのです。主役が大技を発揮しなければ、この作品は成功しません。わがラーフはこの大役を支える体力に欠けます。幾多の経験からこうした判断を下すのです。公妃様よ、あなたを敬愛し、卓越したラーフの才能に感嘆する余輩を、なにとぞ信頼ください。……

これなる歌劇の公演は予想に外れ、メスタシオに多大の喜びを与えた。比類なきラーフが万難を克服したのである。劇作家自身の予想ではなく、デルモンテ公妃のそれが的中した。ラーフの才幹に対する全幅の信頼が、ナポリでの舞台に先立つメスタシオの危惧を凌駕したのである。公妃に宛てた別の書簡でメスタシオは、つぎのように彼を擁護もした。

#### メスタシオ デルモンテ公妃宛書簡（日付不明）

どこで歌おうと、比類なきわがラーフが聴衆の心情を、魅了することに疑問の余地はありません。だが、伝えられるところでは、予定される劇場は巨大過ぎるようで、そこでもラーフの繊細で高雅な表現が発揮され、まさしく彼特有の驚嘆すべき歌唱を聴けるとは、推断し難いのです。事実を省みぬ立論ではないと、公妃様は申されます。予言するのではなく、推論するのが肝要と余輩はお答えしましょう。……②

なお、一七四〇年メスタシオが執筆した『執政官アティリウス・レグルス』は、一七五三年ヨンメツリの作曲により一七五三年一月ローマのテアトロ・デレ・ダーメで初演が行われた。しかし、このとき主役を担ったのは、カストラート歌手ヴェンツィラ・ロセツティであつて、ラーフは出演していない。高名な音楽史家バーネイの判断ではあるが、さきの書簡の日付を一七五一年とする解説は一七六〇年頃と訂正すべきであろう。

ナポリ在住のデルモンテ公妃アンナ・フランシエスカは学芸のパトロンとして広く知られ、劇作家メスタシオはつ

① *Quell'usignolo, Le site des premiers interprètes baroques et classiques*, Anton Raaff. online.  
*Arbogast, op.cit.*, S.167.

② *Charles Burney, Memoirs of the Life and Writings of the abate Metastasio. in which are incororated, translations of his principal Letters.* London, 1794. volume I, pp.405-407.

とに一七二二年デルモンテ公アントニオ・ピニャッテリとの婚礼に際し、セレナード「結婚頌歌」を執筆した。同公家は神聖ローマ帝国ジェノアの名門に由来し、一六一九年スペイン王権から爵位を授けられた。両シチリア王国の奪還を狙う王妃イザベル・ファルネーゼは、一七三四年ポーランド継承戦争を奇貨として、スペイン艦隊にジェノアへの上陸を命じ、彼女の実子、パルム公カルロスがこれに合流してナポリを占領する。悪政を重ねた神聖ローマ帝国の総督は敗走し、カルロスは南イタリアの繁栄を約束して、即位の宣言を行った。他方反撃に転じたオーストリア勢力が、最高司令官に擁立したのが、地元の高家にして軍部に功績のあるデルモンテ公アントニオである。やがてイタリア半島の東南端におけるビントの戦いで、オーストリア率いる騎兵隊がスペイン艦隊の大軍に撃破され、敗北を喫する。こうして王位を確立したカルロス三世は、以後デルモンテ公家の家柄と榮譽を尊重する。一七三五年にはスペイン王権から金羊毛騎士団勲章を、また一七六五年には両シチリア王国国王フェルディナンド一世から聖ヤヌアリウス勲章を授けられたデルモンテ公アントニオは一七七一年に他界した。なお、補論で述べるとおり、伴侶を喪った悲痛で精神疾患に冒された公妃は、歌手ラーフの歌唱によって快癒し、一七七九年まで存命した。①

ラーフが故郷のライン地方に定住するのは、イタリアへ帰還して十年後、一七七〇年からである。宮廷音楽家としてのマンハイム時代について、アルボガストは手短かに誌す。

一七七〇年八月ラーフはプファルツ選帝侯カルロ・テオドールに招請され、マンハイムで仕えることになった。年俸一五〇〇フローリンを支給され、ドイツでもっとも著名な舞台で歌うのである。ピシーニ、バッハ、ホルツバウアーの作品に登場し、オペラの公演に際して多数の音楽家、なかでもヨハン・クリステイアン・バッハとモーツアルトと交誼を深めた。モーツアルトとはとくに親しく一七七二年パリへの旅にも同行する。一七七八年ラーフはヴルテンブルクに招かれて、ルドウィッグスブルク城でヨンメッリ作曲のオペラに出演した。②

### 第三節 モーツアルトのマンハイム・パリ旅行と宮廷歌手ラーフの支援

一七四三年プファルツ選帝侯を相続したカルロ・テオドールは、フランス文化への関心が深く、一七二四年ハイデルベルクに代って首都へ昇格したマンハイムにとってヴェルサイユこそ模範と考えた。彼は美術アカデミーを創設し、国民劇場の建設や図書館の充実を達成する。なかでも注目すべきは〈マンハイム楽派〉と呼ばれる音楽部門であって、世界のいかなるオーケストラもマンハイム管弦楽団を凌駕できぬと評された。こうした演劇や音楽の活動ではドイツ選帝侯奨励のもとに、しばしばドイツの詩人が脚色し、ドイツの音楽家が作曲し、ドイツの歌手が歌唱し、民族的自覚の先駆として多くのドイツ人芸術家がマンハイムも参集した。マンハイム生れのクリスティアン・カンナビヒは十七年間マンハイム管弦楽団のコンサートマスターを勤め、しばしばハリへ派遣されたのち、のちに同楽団の音楽監督に就任した。また、ウイーン宮廷劇場のカペルマイスタであった作曲家イグナーツ・ホルツバウアーは、一七五三年マンハイム宮廷に招請され、ドイツ語歌劇の興隆を進めた。③

一七七七年九月二三日母マリア・アンナとともにザルツブルクを出立したヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトは、ミュンヘンとアウグスブルクに滞在したのち、同年十月三十日マンハイムに到着する。有、まもなくヴァイオリ

① *The Non-Sovereign Princely and Ducal Houses of Europe*, volume III-BIII, the princely House of Belmonte. online.

Pietro Colletta, *History of the Kingdom of Naples 1734-1825*. Edinburgh, 1858. volume I. pp.29-30, 37-41.

② *Arbogast, op.cit.*, SS.167-168.

③ 海老沢敏著、前掲。一三四・一三七頁。

ン奏者ダナー父子の案内によつてかれはコンサート・マスターのカンナビや楽長のホルツバウアーを訪問する。その際に彼はカンナビの娘のためソナタを書き、管楽奏者にはオーボエ協奏曲を献呈した。おりしもマンハイム宮廷では十一月四日防災の守護聖人ポロメオの祝日から三日間にわたつて祝典が催され、ホルツバウアー作曲のドイツ語歌劇ホルツバウアー作曲『ギュンター・フォン・シュヴァルツブルク』が上演されるとともに、第三日にはモーツアルト自身ピアノ演奏を披露した。舞台における高齢のラーフを彼が認識したのは、この祝典においてである。こうした到着直後の消息については夫に宛てたマリア・アンナの書簡がより詳細であり、ヴォルフガング自身の報告は追伸として添付される。① なかでも同年十一月十四日付両者の便りは、名歌手と大作曲家の感動的な連携の端緒を語る貴重な史料である。

マリア・アンナ・モーツアルト 一七七七年十一月十四日付書簡

宛先 ザルツブルグ在住レオポルド・モーツアルト宛

マンハイム、一七七七年十一月十四日

愛しき背の君へ

昨日そちらに手紙を送りましたが、重ねて今日別の便りを書き始めます。ヴォルフガングがラーフ様のご好意を得たか、とあなたはお手紙で問われました。お答えできるのは、この方が立派で篤実な人物で、それ以上にはなにも期待できません。かつては素晴らしい歌手であつたと評され、今回のオペラ公演でも歌いましたが、やはりご老体のマイスナー様と同じく衰えは目立ちます。むしろ私はマイスナー様の歌を聴けたらと思います。ともあれラーフ様はきわめて篤実なお方で、私も音楽アカデミーでお話ししました。わが子ヴォルフガングの実力に驚嘆され、祝福の言葉を私に申されました。楽長ホルツバウアー様にも彼は高く評価されています。

同書簡へのヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトの追伸

・・・オペラについては手短かに書きます。ホルツバウアーの音楽は非常に美しいのですが、詩文がそれに釣り合いません。音楽には信じ難いほどの熱気があり、ホルツバウアーほどのご老体が、かくも精神の輝きを示すことにとりわけ感嘆しました。プリ・マドンアを演じたエリサベタ・ヴェンドリング夫人は、フルート奏者の奥様ではなく、ヴァイオリン奏者の奥様ですが、病弱の身です。しかもこのオペラは彼女を予定したものではありません。イギリス在住のダンツイなる歌手を念頭に書かれたもので、ヴェンドリング夫人には適せず、高音すぎます。ラーフ殿はアリア四つと小節四百五〇ほどの曲を一気に歌たので、その歌唱が冴えぬ原因はなによりも声音にある、とぼくは気づきました。アリアの歌い始めを聴くならば、これが老いたるラーフ、かつて著名であつた名テノールとは思わず、だれしも心底で笑うでしょう。これこそ現実だ、と自分は考え込みました。歌うのがラーフであると知らなければ、ともに笑つたでしょう。反対にハンカチを取り出し、ぼくはそれを濡らしたのです。当地の人が言うように、彼は俳優としてこれまで生きてわけはありません。歌唱を聴かせる人物であつて、演技を見せる人物ではなく、所作の重要な役割を担つたこともありません。このオペラでも臨終にながく歌います。ゆつくりとしたアリアを続けながら、口元に笑みを浮べて死んでいきます。アリアの最後にはラーフの声がとくに衰え、聴くに堪えぬほどです。・・・②

① 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第三卷、白水社、一九八七年。一九四―一九九、二二六―二二二頁。

② Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*, Kasel, 2005. Band II, SS.123, 125, 33-34. 「参照」海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第三卷、白水社、一九八七年。二五一、二五三頁。

マンハイムにおけるモーツアルトの滞在は翌年まで続き、選帝侯宮廷をはじめさまざまな会場で演奏を重ね。貴頭の子弟には音楽の指導も引受けた。ふたつのフルート協奏曲や五つのヴァイオリン・ソナタが作曲されたのもマンハイム時代である。しかし、卓越した才能を選帝侯から認められ、鄭重な応対を受けつつも、宮廷音楽家としての招聘を得ることは不首尾に終わった。①

他方ミュンヘンでは一七七七年十二月三十日バイエルン選帝侯マクシミリアン三世ヨーゼフが急死し、同族であるプファルツ選帝侯カール・テオドルが、後継者としてその地位を兼任すると宣言する。かねて領土の拡大を狙う神聖ローマ帝国は、テオドルとの密約によってバイエルン侯領の一部を割譲させ、一万五千人の軍隊に進駐を命じた。選帝侯位をめぐる神聖ローマ帝国ヨゼフ二世との密約は、プロイセン王国フリードリッヒ二世の頑強な抵抗を招き、ロシアとイギリスもこれに同調してバイエルン継承戦争が勃発する。マクシミリアン三世逝去の模様とテオドルの後継宣言を一七七八年一月五日付書簡で伝えたレオポルド・モーツアルトは、二週後の書簡においてオーストリア軍のバイエルン進駐とプロイセンとの臨戦状況を危惧する。②

こうした政情の緊迫のなかでレオポルド・モーツアルトは、名声と栄達を獲得すべく、かくなれば一路パリへ向うよう、愛息ヴォルフガングに強く要望する。プファルツ選帝侯領公使グリム男爵をはじめ、十年前のフランス滞在で交誼を結んだ啓蒙思想家に支援を依頼するとともに、彼は長旅の旅程、宿泊、費用、注意、等々について逐一教示した。ヴォルフガング自身の特別な準備としては、新たな創作の数々である。③ ラーフのために仕上げたアリアもそこに含まれ、知己に富むこの名歌手からパリ同行の合意を得た。出発を目前にする一七七八年の書簡にはパリ滞

在への期待とともにラーフとの連携が語られる。

### ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトの書簡

宛先 ザルツブルグ在住レオポルド・モーツアルト

マンハイム、一七七八年二月二八日

・・・作曲したばかりのアリアを携えて、昨日ラーフ殿を訪ねました。(作品ケッヘル二九五) 歌詞は「美しき敵よ、わが唇を信じないならば、」等々。メタスタジオによる歌詞ではないようですが、ぼくのアリアは彼を大層喜ばせました。これほどの人物には格別の配慮を要します。同じ歌詞によるアリアがすでに彼の演目であり、慎重にこれを選んだのです。そうした曲目をすでに有するので、ぼくのアリアをより軽快に、より欣然と歌えるはずです。「声帯に合わず、好みに副わなければ、率直に申されよ。お望みならば、修正するか、新たに作りましょう。」「かくも麗しい曲を、直す必要は断じてない。」と彼は応えました。「自分の発声がもはや長い曲には耐え得ないので、願うとすれば、短縮して欲しい。」「お望みどおり喜んで短くしましょう。総じて短縮は易しく、拡張が難事であるため、もともと長いめに作曲したのです。」ラーフは第二節を歌ったあと、眼鏡を外してぼくを見詰めました。「麗しい、麗しい！」

① 海老沢敏著、前掲。二四五、二五九・二五〇、二五二・二五六頁。

② 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第三巻。四〇四・四〇六、四二二・四二四、四三二・四三三、四五一・四五二頁。

Frédéric II, roi de Prusse, Mémoires sur la guerre de 1778. *Oeuvres Historiques*, tome VI, Berlin, 1798. SS.137-138.

③ 海老沢敏著、前掲。二六八・二七三。

海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第三巻。二六四・二六六、三四三・三四四、四三六・四三九、五〇四・五〇八、五一七頁。

第二節はまことに魅力的だ。」かく述べてそれを三度歌いました。別れを告げると、彼は鄭重に会釈をし、「歌い易いようこれを修正しましょう」と自分も約束しました。なぜなら、立派に仕立てられた洋服のように、歌い手に美事適合するアリアを作曲すべきです。

①

一七七八年三月十四日マンハイムから馬車で出立したモーツアルト母子は、メッツやクレルモンを経て十日後パリに到着した。権威ある公開演奏会コンセール・スピリチュエルに向けて作曲を依頼されたヴォルフガングは、その支配人ル・グロの邸宅で制作を進めた。同年四月五日ザルツブルクへの書簡で彼は言う。「ラーフ様も当地に滞在し、ル・グロ様のところに泊っているのです、ほとんど毎日一緒にいます。」② その二カ月後の書簡で母マリア・アンアがパリ滞在の詳細をレオポルドへ報告し、追伸としてヴォルフガングはラーフの歌唱力に関して綿密な認識を開陳する。

マリア・アンナ・モーツアルト 一七七八年六月十二日付書簡

宛先 ザルツブルグ在住レオポルド・モーツアルト宛

差出 発信 パリ、一七七八年六月十二日

愛しき背の君へ

五月二十八日付のお手紙を六月九日に拝受し、お元気の由嬉しく承りました。幸い私もヴォルフガングも元気でおります。ただし、私は昨日瀉血をして頂いたので、今日はあまり多く書けません。ヴォルフガングは外出して、(バリエルン選帝侯領パリ駐在公使) ジッキンゲン伯爵邸でラーフ様と食事をしています。ふたりは少なくとも週一度はそのお屋敷を訪ね、ヴォルフガングは伯爵様から格別のご好意を頂いています。ご自身も音楽に通曉され、みずから作曲もされます。ラーフ様はここへもほとんど毎日来られ、私をご母堂と呼ばれるのです。居心地がよいらしく、大抵は二時頃から三時頃までともに過します。私に聴かせるために訪ねたとして、アリアを三曲歌われた日もあって、大層嬉しく思いました。ほかの日にもかならず私のためにか歌って頂けます。ラーフ様の歌唱が私は大好きです。真に尊敬すべき方、本当に真摯なお方です。あなたも親交を結ばれば、敬愛なさるでしょう。

私たちがどこに泊っているか、あなたは問われるでしょう。まずモンマルトル街の位置を確かめ、ついでクレリー街を探してください。クレリー街はモンマルトル街から最初に左手に折れる瀟洒な小路で、ここに住むのはおおむね身分の高い方々です。辺鄙ならず、きわめて清潔で、空気の健全な一角に滞在でき、宿主も親切で誠実であるのは打算的なパリで珍しいことです。

同書簡へのヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトの追伸

親愛なるラーフについてここで多少語らねばなりません。よく覚えているでしょうが、マンハイムからの便りでは彼をあまり評価できぬ、期待外れで、歌い方に満足できぬ、とぼくは書きました。その原因は彼が歌うのをマンハイムでじっくり聴けなかったことです。「中略」結局ラーフ様はパリまで来て、コンセール・スピリチュエルへ初登場し、私

① Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*, Kassel, 2005. Band II, SS.303-304.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第三巻。五六二-五六三頁。

② Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band II, SS.332..

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻、白水社、一九九〇年。二五頁。

がとくに愛好する曲、バッハの詠唱『我知らず、いづこから来たるや』を歌いました。彼の歌唱をそのとき初めて傾聴し、願いが充されたのです。ただ、技巧そのもの、ベルナツキ派の技は多くの好みに合いません。カンタービレでは誇張が強すぎます。若き日の最盛期には効果を發揮し、聴衆を感嘆させたことは判りますが、いまなお誇張するのは笑止の沙汰と言えます。「中略」自分に好ましく思われるは、ラーフが小品を歌うとき、たとえばアンダンティーノを歌うときです。アリアについても独自の表現を駆使し、気韻縹渺と評されます。華麗な難曲こそラーフが真価を發揮したと推測します。豊かな胸声と悠々たる抑揚。高齢にもかかわらず、その片鱗はなお認められます。そして、いまはアンダンティーノです。眼を閉じて聴き入ると、ラーフの歌声は麗しく、心地よく感じます。マイスナーとかなり似通うのですが、ラーフの歌のほうが一層快適に思われます。「中略」しかし、本格的なカンタービレではマイスナーのほうが好ましいのです。彼にも誇張が伴うのを不満としますが、ラーフ様よりも格段優れています。しかし、技巧を要する華麗な難曲、経過句、急速な裝飾音となれば、ラーフは名人です。さらに彼の明確で明快な発声も美事です。さきに述べたアンダンティーノ、ないし小唄については、自身の作曲が四つあり、魅力的なものです。ラーフ様にぼくは愛して頂き、ふたりは友誼で結ばれています。ほとんど毎日彼はぼくたちの宿へ訪ねてきます。

プファルツから派遣されたジツキンゲン伯爵邸です。六度も正餐に招かれました。いつも午後一時から十時までお邪魔しますが、そこでは長い時間も気づかぬほどに速く過ぎます。伯爵はぼくに好意を寄せられ、自分も喜んでお訪ねしています。きわめて気さくで、明敏なお人柄あって、健全な知性と音楽への高い見識を備えておられます。今日もラーフ様と一緒に伺いました。以前より伯爵に囑望されていたので、自作をいくつか持参したのです。聖体拝受の祝日コンセール・スピリチュエルの劈頭に演奏すべく、仕上げたばかりの交響曲もそこに含まれます。この作品は居合わせただれにも気に入る、ぼく自身をも満足させました。①

ラーフとモーツアルトが招致されたコンセール・スピリチュエルは、絶対王政の厳しい芸術規制を脱却し、音楽への社会的関心を喚起した非公式の公開演奏会である。王室礼拝堂の器楽奏者アンヌ・ダリカン・フィリドールは一七二五年王権の認可を得て、三月十八日イエス受難の主日に、パリのチュイルリー宮スイス館で第一回を主宰し、王立音楽アカデミーの演奏家やパリ主要教会の合唱団もこれに参加した。イギリスでヘンデルと拮抗したボンンチーニは、一七三三年チュイルリー宮殿で自作の讚美歌『ミゼレーレ』を披露する。ファリネリに比肩する高名なカストラート歌手カツファレリは、一七五三年コンセール・スピリチュエルで二曲のアリアを歌うとともに、ヴェルサイユに招かれて妊娠中の王太子妃マリ・ジョセフ・デ・サク스에美声を捧げた。このとき胎中にあつたルイ・アウグストは、一七六五年王太子ルイの夭折によって、のちにルイ十六世として即位する。パリでの公演から二年後の春、カツファレリはリスボンにおけるテージョ王立歌劇場柿落しに出演し、ラーフとともにまもなくマドリッドへ移つたので、大地震による被害を免れた。フランス交響曲の父とされるゴセックは一七七三年からコンセール・スピリチュエルの支配人に加わり、演奏会の規模と内容を革新した。彼は自作のミサ曲やオラトリオをそこに供するとともに、知られざる新規の作曲、なかでもハイドンの交響曲をプログラムに組み入れた。②

王立音楽アカデミーの歌手として名声を博したジョセフ・ルグロは、一七七七年に引退してコンセール・スピリチュエルの支配人に就任した。直後の三月三十一日王妃マリ・アントワネットが初めてこの演奏会に臨席し、ゴセックの交響曲を視聴した。ルグロの邸宅に滞在する六四歳のラーフが、チュイルリー宮で喝采を博するのは、翌年春の四旬節である。③

ルグロを訪問したモーツアルトがコンセール・スピリチュエルのためまず依頼されたのは、ホルツバウアーの宗教曲『ミ

① Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesantausgabe*. Band II, SS.375-378.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。一〇七―一〇八、一一〇―一一二頁。

② Michel Brenet, *Les Concerts en France sous l'ancien régime*, Paris, 1900. pp.115-118, 123-124, 245-246, 301-305, 309-310.

③ *Ibid.*, pp.314-318.

ゼレーレ』を編曲することであった。しかし、ついで作曲を所望された管楽器のための協奏交響曲とともに、作成における支障や上演に際しての齟齬<sup>そご</sup>のため、チュイルリー宮での披露は不本意な結果に終わった。だが、一七七八年六月十二日の追伸で予告された交響曲第三二番K二九七、いわゆるパリ交響曲は同月十八日聖体の祝日に初演され、聴衆の喝采のもとに大成功を収めた。とはいえ、この時期にモーツアルトの身边には深刻な激変が進みつつあった。つぎに抄訳する同年七月三日付書簡は、彼の生涯における重要な記録のひとつである。①

### モーツアルト一七七八年七月三日付父親宛書簡

パリ、一七七八年七月三日

#### 敬愛する父上へ

苦渋にして悲痛な消息を送らねばなりません。去る十一日付のお手紙に返信が遅れた理由です。

愛する母が重態です。いつものように瀉血の治療を受けました。必要に迫られ、順調に済みました。しかし、数日後悪寒を覚え、発熱も生じました。さらに下痢と頭痛が続きます。とりあえず家庭薬の痙攣止散薬を与えました。黒色粉薬を用いたのですが、持ち合わせがなく、「癩癩薬を」と求めてもここでは通じません。容態は悪くなるばかりで、話すのが難しく、大声でなければ、聞こえぬようです。グリム男爵は侍医を派遣してくれました。それでも非常に衰弱し、高熱が続いてうわごとを口にします。なお希望はある、とひとは言いますが、ぼくには判りません。すでに何日も日夜怖れと希望の間をさまよっています。「中略」すべての希望が消えた、と言うのではありません。母が死に瀕するとか、臨終にあると言うのではありません。神の恵みがあれば、恢復して元気になれるでしょう。母の生命と健康が護られよう全身全霊を挙げて神にお祈りし、恢復できるとの希望で自己の心を癒しています。ぼくにとつて静穏で自在な魂がどれほど大切か、容易にお察し頂けるでしょう。さて、話題を変えましょう。こうした悲痛から離れて、慎ましく希望を語りましょう。「中略」

コンセル・スピリチュエルの劈頭を飾るべく、ぼくは交響曲の作曲を囑望されました。この曲は聖体の祝日に演奏されて、満場の喝采を博しました。その模様は『ヨーロッパ通信』でも報道されたと聞きます。つまり大成功を収めました。「中略」万物が神の崇高なる栄光と榮譽のため存すると信じ、すべての手筈が順調に運ぶよう、僕は恩寵を祈願します。いよいよ交響曲の演奏が始まり、ラーフはぼくと並んで起立していました。確実に喜ばれるパッサージュを第一楽章アレグロの真中に組んであり、そこでは全聴衆が陶然として鳴り止まぬ喝采となりました。作曲の時点でそうした効果を自分は確信していたので、最後の楽章アレグロにももう一度それを組み入れました。かくしてアンコールに呼び戻されます。アンダンテの楽章もそうですが、マルチャーニ様からとくにアレグロの楽章が彼らを熱狂させました。②

いわゆるマンハイム・パリ旅行において日常の世話に勤め、訪問や演奏の場合も同行した母マリア・アンナは、コンセル・スピリチュエルにおける成功に前後して七月三日朝に病死した。右記の書簡が執筆されたのは、当日の午後であるが、父レオポルトへの衝撃を憂慮して、心優しいヴォルフガングは母親の重態を伝えたに止まる。数々の名曲を創り、演奏会での好評を博しながら、栄達への支援をとくに懇請されたグリム男爵が冷淡な対応を変えず、ヴェルサイユでは宮廷音楽家としての登用に至らなかつた。ポローニヤの高名な修道士メルチャーニに宛てた書簡にはこの

① Otto Jahn, *Life of Mozart*, translated by Pauline D. Townsends, London, 1882. volume II, pp.38-40, 49-52.

海老沢敏著、前掲。二九四・二九六、三二〇・三二二頁。

② Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesantausgabe*. Band II, SS.387-388.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。一三二・一三四頁。

時期におけるモーツアルト父子の苦衷とラーフの尽力が語られる。

## レオポルド・モーツアルト 一七七八年八月二一日付書簡

宛先 イタリア、ボローニヤ  
神父ジャンバティスタ・マルティーニ  
差出 オーストリア、ザルツブルグ

・・・尊師様のもとへはマンハイム宮廷への効験高き推薦状によって愚息をご加護くださるよう、さきをお願い致しました。これについて小生は懇切なるご返信を頂きました。「ご息を選帝侯に余輩から推挙する旨、ラーフに書状を託しましょう。」〔中略〕失礼ながら、敬愛する尊きマルティーニ様、ラーフへはその書状が届いておりません。

愚息は昨年三月二三日母親とともにパリへ着きました。ラーフ様もまもなくそこへ来られ、旧交を暖めたのです。ヴォルフガングに会うため彼はほとんど毎日来訪され、二時間から三時間一緒に過ごし、愚妻を母上と呼んで頂きました。そして、愚息が選帝侯のお抱えになれば、最高に嬉しいと申されました。しかるになんたる悲劇でしょう。運命の導きによつて最愛なる妻が病に倒れ、二週後にこの世を去りました。神よ！なんたる不幸でしょう。ふかく敬愛する尊師様！小生と愚娘の有様、またパリで孤独と悲哀に沈むヴォルフガングの有様をご推察ください。選帝侯が一旦マンハイムへ戻られたので、懇請のためラーフはパリからそこへ出立しました。離れる際に彼は愚息への篤き友情と強い支援を確約され、マルティーニ様から直々の推薦状を頂くことが肝要と申されました。ご承知のように選帝侯がドイツ語のオペラしか希望されず、それゆえドイツ人の作曲家しか必要とされぬいまこそ、まさに好機と存じます。

・・・①

## 第四節 モーツアルトの歌劇『イドメニオ』の作曲と主役ラーフの歌唱

神聖ローマ帝国皇帝とカール・テオドールの密約に端を発したバイエルン継承戦争は、ハプスブルク帝国の版図ポヘミアへプロイセンが侵攻し、これにロシアとイギリスが同調して戦場では総計四十万人の兵士が対峙した。ミュンヘンを揺がすヨーロッパの激動を、逐一家族に知らせるレオポルド・モーツアルトは、一七七八年十二月二八日付書簡で、バイエルン全域がオーストリアに併合される危機、ドイツ諸領、ポーランド、スウェーデン、スペインをも巻き込み、ヨーロッパ全土の大戦となる危惧を語る。その翌年ポヘミア戦線の膠着とオーストリア皇太后マリア・テレジアの諫制を背景に、ロシアとフランスの調停によつて、オーストリアとプロイセンのテッシェン条約が結ばれた。こうしてオーストリアに対するバイエルン領土の一部割譲、プロイセンのバイロイト辺境領等併合を条件に、テオドールのバイエルン選帝侯即位が承認された。②この戦争にみずから参戦し、枢要な役割を果たしたプロイセン国王フレデリック二世の講和記録を参照する。

## プロイセン国王フレデリック二世「一七七八年の戦史」

① Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesantausgabe*. Band II, SS.447-448.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四卷。二二九・二三〇頁。

② 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四卷。三六九・三七一頁。

Frédéric II, roi de Prusse, *op.cit.*, tome VI, pp.173-176.

オーストリア帝国の女帝マリア・テレジアが停戦を切望される、との急報がオーストリア駐在フランス大使ブルトウイユ男爵からまもなくロシアのニコライ・レプニン公爵に送られた。プロイセン国王は三月四日この情報に接し、停戦の提案をも予想して、敵軍を静観しよう将官に命令した。その期限はボヘミアにおいて七日まで、北シレジアとモラヴィアは八日まで、ザクセンは十日までである。期限が過ぎるや、有利な地歩を確保し、前線に忍び始めた悪疫をとりわけ避けるべく、広範な地域へ軍隊を拡散させた。同月六日国王はブレスラウに到着し、レプニン公爵と会見する。講和会議の地としてテッシェンが合意され、プロイセン国王の全権大使にリエデゼル将軍が任命された。やがてプファルツ選帝侯公使としてテリング・ゼーフェルド伯爵もブレスラウへ着く。これら各国代表の二団、ゼーフェルドをはじめ、レプニン公爵、ザクセン公使ジンゼンドルフ、都市ツヴァイブリュッケン公使ホーヘンヘルスはさらにテッシェンまで出向き、フランス王国全権大使ブルトウイユならびにオーストリア帝国全権大使コベンズルと和平会議において合流した。〔中略〕

講和会議の合意については主要な事項を記述するに留める。第一には神聖ローマ帝国皇帝が、ブルクハウゼン一団を除き、バイエルン全域と北プファルツをプファルツ選帝侯の所領と認めることである。また、ツヴァイブリュッケンなど諸都市には自治的な相続が保持される。ザクセン選帝侯には被害の代償として総額六〇〇万フローリン、年間五〇万フローリンが償還される。さらにザクセン選帝侯領の飛び地であるシューンブルグについて神聖ローマ帝国皇帝は権利を放棄する。バイロイト辺境伯およびアンスバッハ辺境伯の相続に関してはプロイセンの権限に戻して、神聖ローマ帝国皇帝もその正当性を認め、干渉せぬことを約束する。他方プロイセン国王はユーリッヒ公国とベルク公国への権利を放棄し、一七四一年締結のシレジエ条約でフランスが確約したとおり、これらをズルツバッハの所領とみなす。なお、所領を侵害されたメクレンブルク公爵も補償への権利を認められる。以上の如き講和条約がロシア、フランス、ドイツ語圏諸国の合意によって成立した。

フレデリック二世『歴史著作集第六卷』（ベルリン、一七九八年） ①

ミュンヘンへの遷都に伴ってマンハイムの宮廷音楽もバイエルンへ移転し、庇護される音楽家、すなわち管弦楽長のカンナビヒ、ヴァイオリン奏者ダンナー、ファゴット奏者リッター、声楽のヴェーバー一家、そしてパリから帰ったラーフも転居した。十六世紀にミュンヘンはヨーロッパで枢要な音楽中心地に数えられ、作曲家オルランドウス・ラッスはローマ教皇庁から最高の榮譽を授けられた。バイエルン一帯が三十年戦争で疲弊した十七世紀中葉、一六五四年選帝侯マクシミリアン二世の宮廷にドイツ最初の歌劇場、サルヴァトーレ劇場が付設された。そこには作曲家、歌手、器楽奏者など四十名以上の宮廷音楽家が擁され、多くのイタリア・オペラが供されるとともに、ドイツ語による作品をも奨励された。謝肉祭オペラ上演もこの時期に始まり、これに先立つ謝肉祭行列にはあらゆる身分・職種 of 扮装とともに、多様な楽器演奏が組み込まれたとされる。② マクシミリアン三世の逝去によって中断された謝肉祭オペラは、テッシェン条約の締結によって一七八〇年再開され、それとともに翌年のプログラムとしてザルツブルク在住の若手音楽家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトに作曲を依頼することが決定された。このとき宮廷に彼を推挙したのは、多年の親交ある楽長カンナビヒ、フランスから帰国したテノール歌手ラーフ、さらには選帝侯テオドールの愛寵、ソプラノ歌手バウムガルテン伯爵夫人である。③

① Frédéric II, roi de Prusse, *op.cit.*, tome VI, pp.172-173, 176.

② ローベルト・ミュンスター『バイエルンの宮廷と修道院』ジョージ・ビュロー編・関根俊子監訳『西洋の音楽と社会』5、後期バロックⅡドイツ音楽の興隆』音楽の友社、一九九六年。一一七-一二八。

③ Atila Csampai und Dietmar Holland, *Wolfgang Amadeus Mozart Idomeno*, Wien, 1987. SS. 171-174.  
アッティラ・チャンバイ・ディートマル・ホラント編『モーツァルト イドメネオ』（名作オペラ ブックス）、音楽の友社、一九八九年。一九七-二〇一頁。

フランス古典主義の名作、フェヌロン著『テレマックの冒険』に基づく台本によってオペラを作曲されたいとの依頼が、音楽監督ゼーアウ伯爵からザルツブルグ在住のヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトのもとに届いたのは、一七八〇年のなかばであった。半年のパリ滞在が不本意な成果に終わり、マンハイムやミュンヘンへ迂回して一七七九年一月ザルツブルグへ帰郷したヴォルフガングは、大司教宮廷の音楽家として失意の日々を過ごしていた。台本の作者としてはザルツブルグ宮廷司祭ジャンバティスタ・ヴァレスコが選ばれ、入魂の歌劇『イドメネオ』の第一幕を、モーツアルトはミュンヘンへ旅立つ以前に早くもほぼ書き上げた。<sup>①</sup>

フェヌロンの名著を典拠とし、ヴァレスコの台本に『イドメネオ』は、ギリシャ神話に登場する神々や歴史上の英雄を描くオペラ・セリアである。クレタの王イドメネオは、トロイアにおける戦争が終結したあと、帰還する船隊で嵐に襲われた。この危機は海神ネプチューンに誓約することで救われる。すなわち、クレタへの上陸後、最初に出会う人物を生贄に供する、と誓ったのである。しかし、上陸したイドメネオが、最初に顔を合わせたのは、わが子であるイダマンテであった。トロイアの王女イリアは捕虜としてクレタで繋がれていたが、王子イダマンテから秘かに愛される。他方クレタに身を寄せるギリシャ本土アルゴスの王女エレットラも彼を愛し、イドメネオの誓約を知ったクレタの廷臣は、彼女とイダマンテをアルゴスへ避難させるよう図った。このとき破約に激怒した海神が、怪物を煽動してクレタを攪乱させる。生贄の奉納を迫られたイドメネオは、むしろ自己を捧げることへと傾き、他方怪物を退治しつつイダマンテも誓約による死を覚悟する。かくして国王と王子が死に臨む祭儀が開かれ、王女イリヤも身代わりにと叫ぶなかで、慈悲を求める合唱に応え、神託が響き渡った。イドメネオを救済し、退位させること、イダマンテとイリヤに王位を継承させることを海神が命じたのである。<sup>②</sup>

十一月七日ミュンヘンに到着したモーツアルトは、バイエルン選帝侯に拝謁し、カンバビヒ一家やゼーアウ伯爵の激励を受けながら、委嘱された歌劇の作曲と推敲に専念した。初演に先立って現地に長期滞在するのは、運営や演出の担当者、楽団員や歌手との調整を重視するからである。マンハイム以来の宮廷音楽家ラーフが主役の国王イドメネオを演じ、王子にはイダマンテにはテノールのプラート、王子に恋するトロイア王女イリヤと王子に付き添うアルゴス王女エレットラにはヴェンドリング家の姉妹、すなわちドロテアとエリザベトが選ばれた。こうした調整のためヴェレストによる台本の修正が再三必要となり、これを仲介したのがレオポルド・モーツアルトであった。こうしてザルツブルグとミュンヘンとの間に交わされた父子の書簡は、著名な歌劇の製作過程について稀有な資料となる。

一九七二年刊行の『新モーツアルト全集』において『イドメネオ』の学問的・批判的スコアを編纂したアメリカの音楽学者ダニエル・ハーツは、製作過程の精密な研究「名歌手ラーフの最後のアリア―ハツセの心情を受け継ぐモーツアルトの牧歌」の冒頭で主演歌手に係わるモーツアルトの作曲技法をつぎのように述べる。

一七八〇年から一七八一年に至る『イドメネオ』の作曲以前にモーツアルトは、演奏会用アリアや舞台芸術に関して、しばしば同時代の名歌手に作曲を適合させるよう苦心した。まず念頭に浮ぶのは、カストラート歌手ジョヴァンニ・マンツォーリに係わる事例である。一七六四年から一七六五年にかけてロンドンで歌唱の指導を受け、以前からその声を熟知するマンツォーリのため、モーツアルトは祝典劇『アルバのアスカーニョ』の主題曲を書いた。この場合作品の仕立ては完璧であった。(仕立て)とは彼みずから名づけた創作の技法である。歌劇『ミトリダード』について一七七〇年十一月二四日ミラノへ送信された父レオポルドの書簡によれば、服を注文した当人の寸法を仕立屋

① 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。四三七-四三八頁。

② Atila Csampai und Dietmar Holland, *op. cit.*, SS.33-35.

アッティラ・チャンバイ―ディートマル・ホラント編、前掲、四三二-四四頁。

が測るごとく、歌い手の声音を確かめたあとに、モーツァルトも意欲的に作曲に着手する。①

『イドメネオ』に関する台本修正の依頼は、ミュンヘンから発した最初の便り、一七八〇年十一月八日付書簡に早くも現れる。ここではソプラノ歌手ドロテア・ヴェンドリングが歌う王女イーリアのアリアについて、不自然と感じる台詞の修正を宮廷司祭ヴァレスコに依頼するよう父親に求めている。これを受けた司祭の改稿は、レオポルドの同月十一日付返信に同封された。② その四日後モーツァルトはザルツブルグからの支援を感謝するとともに、テノール歌手ラーフのアリアについても台本の変更を懇請する。

### モーツァルト一七八〇年十一月十五日付父親宛書簡

ミュンヘン、一七八〇年十一月十五日

敬愛する父上へ

お手紙ならびに小包すべてをたしかに受け取りました。為替をとくに有難く思います。このところ正餐を自前で摂らずに済みます。だから理髪代、鬘代、洗濯代、それに朝食代のほかは出費がありません。

(ソプラノ歌手ドロテア・ヴェンドリングの)アリアが見違えるように素晴らしくなりました。なおひとつだけ変更をお願いしたく、それはラーフのためです。彼の主張はいつも正しく、そうでないとしても老境の方ゆえ逆らえません。ラーフは昨日も私のもとへきました。彼が第一幕で歌うアリアを予習させたところ、すこぶる満足の様子でした。ただし、寄る年波のためそのアリアと同じく、第二幕のアリア、すなわち「海の果てにも、わが胸にもいまひとつ海あり」では力強く歌うことができません。第一幕のアリアでは台本からして朗唱が難しく、第三幕には彼のアリアが含まれぬため、イドメネオ最後の台詞「おお、幸せなるクレータよ！おお、幸せなる我よ！」のあとで、四重唱に替えて朗々たるアリアを歌いたいと、ラーフは言うのです。たしにここでも無益な旋律を省けば、第三幕がより効果的になるでしょう。また、第二幕最後の場でイドメネオは合唱と合唱の間でひとつのアリア、より適切な表現ではひとつの朗唱を歌います。ここでは器楽を主とするレクタティーヴォを組むほうがよいでしょう。先日ルグランと合意した演技と群衆によつて、この場面は当オペラのもっとも美しい情景となるはずです。「中略」エリザベト・ヴェンドリングは自身のアリアふたつをすでに六度も歌い、大変喜んでいます。ヴェンドリング姉妹がそれぞれ自分のため書かれたアリアを絶賛していると、人づてに聞きました。ラーフについてはもっとも信頼し、親密な友人であることを確言します。③

① Daniel Hertz, Raaff's last aria: a Mozartian idyll in the spirit of Hasse. *The Musical Quarterly* 60. in John A. Rice, *Essays on Opera, 1750-1800*, London, 2016. pp.517-518.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツァルト書簡全集』第二巻、二二六、二二九・二三〇、二二九・二四〇頁。

② 海老沢敏・高橋英郎編『モーツァルト書簡全集』第四巻。四三八・四四〇、四四二・四四三頁。

③ Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band III, SS.19-20.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツァルト書簡全集』第四巻。四五一・四五二頁。

④ Arbogast, *op.cit.*, SS. 168-170.

歌劇の主役として抱負を固めつつあった。ミュンヘンとザルツブルグの間で交わされた台本修正の依頼と応答は、筋書きの改変や幾人かの歌詞変更を変更を含み、かなり複雑であるが、右記の書簡で求められたアリア更新は、レオポルド同月十八日付書簡に同封された。① しばしば単独でも朗唱される第二幕イドメニオのアリアである。

Fuor del mar ho un mare in seno,      海のそとにも余が胸に、ひとつの海があり、  
Che dei primo è più funesto,      荒れる海よりさらに不幸を招くところ、  
E Nettuno ancora in questo      海神ネプチューンにも現れ、  
Mai non cessa minacciar.      なおも威嚇を止まざりし。  
Fiero Numel dimmi almeno:      厳しき神よ！せめて教え給え。  
Se al naufragio è sì vicino      難破に曝されし余の魂に、  
Il mio cor, qual rio destino      いかに無惨な運命が  
Or gli vieta il naufragar?      破滅を許さざるかを。②

### モーツアルト一七八〇年十一月十五日付父親宛書簡

ミュンヘン、一七八〇年十二月一日

敬愛する父上へ

リハーサルをきわめて調子よくできました。ヴァイオリンは六箇所だけでしたが、管楽器は必要なだけ揃いました。この日視聴を許されたのはゼーアウ男爵の妹君と若いザンスハイム伯爵だけです。八日以内にもう一度第一幕のリハーサルをする予定で、今度はヴァイオリンを倍加して十二箇所にします。ついで第一幕と同じように第二幕のリハーサルを行います。みながどれほど喜び、感嘆したかはお伝えできぬほどです。予期したとおりです。食事に行くような平静な気持で、私はそこへ出向いたのです。ザンスハイム伯爵は申されました。「あなたに多々期待したことは確かですが、率直に言えば、これほどまでの期待ではありません。」〔中略〕

昨日の朝ラーフ様が第二幕のアリアを聴かせに私のところへまた来ました。熱烈に愛する若者が美しい恋人に対するように、彼は自分のアリアに強い愛着を抱いています。夜眠るまえに歌い、朝起きてすぐ歌うのです。こうした熱意をまず確かな筋から伝えられ、この日彼からじかに聴きました。（厩舎長官）フィーデック様と（宮中顧問官）カステル様にラーフは申しました。「レスタティーヴォでもアリアでも役柄に会うよう変える習性が自分にはあります。しかし、このたび頂いた作曲はいささかも変えません。なぜなら、すべての音符が私の歌声に即応するからです。」要するにラーフ様は王侯のごとく満悦です。③

ヴァレスコによる再度の改稿もミュンヘンの期待に應えるものではなかった。ラーフの反感が次第に募る。モーツアルトがヴァレスコを弁護し始めると、彼は台本や作曲の担当者を無力と非難するまでになった。彼の不満がとくに昂じたのは、（第三幕第三場の）四重唱における己れの役割で、そこでは朗唱できないからある。すでに（第二幕のアリア）〈海のそとにも〉の歌詞についてもラーフは異議を挟み、そのままでは彼の声音には無理であるため、ミュンヘンにおいてコロラトゥーラを要しない歌詞に変えられていた。モーツアルト父子の要求に苛立つヴァレスコから、さらなる怒りを浴びる覚悟を、モーツアルトは当初覚悟した。「最後のアリアについて」と一七八〇年十二月二七日付書

① 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。四五四・四六〇頁。

② Atila Csampai und Dietmar Holland, *op.cit.*, SS.72-73.

〔参照〕アッティラ・チャンバイ・ディートマル・ホラント編、前掲、八二八三頁

③ Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band III, SS.39-40.

〔参照〕海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。四八四・四八五頁。

簡で彼は難点を指摘する。「ラーフは歌詞に強い不満を抱いています。vinvigorir (甦える) — ringiovenir (若返らせる) — vienni a rinvigorir (われを甦えさせる)と五つの「」が続くのです。アリアの終結においてたしかにこれは非常に耳障りです。この歌詞によるアリアをモーツァルトが創り始めたか否かは不詳である。歌詞への同意を得たうえで、彼は楽想を練り、ラーフに聴かせたはずである。「中略」同月三十日の書簡には新たな提案が示される。「他方ラーフはメタスタージョの脚本による歌劇『ジュピター神の誕生』のなかにこの場面に相応しいアリアを発見しました。祝賀のアリアであつて、あまり知られていません。そのアリアは〈敬慕する天を仰いで、善良なる魂たちよ、……〉ラーフはこの歌詞に作曲するよう私に求めるのです。だれにも判らないし、断る必要もないでしょう。三たびアリアを書き直すことを宮廷司祭に頼むのが至難の業であると、ラーフも充分承知するからです。①

歌劇の山場に他の脚本家による台詞を流用することが、現代では奇異に感じられるが、かつては有名歌手に顕示を誇示させるためにしばしば黙認された。見せ場において一月三日付書簡に至り、ようやくモーツァルトはラーフも納得する歌詞が決まったことを報告する。過酷な運命を克服し、生命と安寧を取り戻す掉尾で、主役イドメネオはアリアはつぎのように歌うのである。

Tourna la pace al core, 心に平安が復し、

Tourna lo spento ardore ; 衰えし熱情戻りき

Fiorisce in me l'eta. 余にも若さが甦える。

Tal la stagion di Lora かくも花の女神フローラの季節は、

L'albero annoso infiora, 老いたる樹に花を咲かせ、

Nuovo vigor gli da. ② 新たな力を与える。

こうした歌詞はレオポルドの散佚した書簡で元旦にラーフのアリアとして提示されたであろうが、実はヴァレスコ自身の改稿ではなく、ザルツブルグでなされた苦肉の策であつた。〈心には平安が帰り、〉以下の全六行は、すでに一七五九年パルマで初演されたカルロ・I・フルゴー二脚本、トンマーゾ・トラエッタ作曲の歌劇『イツポリートとアリーチャ』に現れる。ミュンヘン宮廷の音楽家たちにもこの作品はよく知られていた。ともあれモーツァルトはこの歌詞に即したアリア作成に心砕き、ラーフが歌うべき旋律を急ぎ書き始める。③

前年の十一月二七日オーストリアの女帝マリア・テレジアが逝去し、当初予定された『イドメネオ』の初演も延期されるなかで、一月十三日第三幕のリハーサルが行われる。この時点でモーツァルトは内容の構成に大規模な転換を断行した。すなわち第三幕に含まれる第九場イダマンテのアリア、第十場エレットラのアリア、最終場イドメネオのアリアをはじめ、台詞にして全三幕約一六〇行が一举に削除されたのである。

### モーツァルト一七八一年一月十八日付父親宛書簡

……第三幕のリハーサルは美事に遂行できました。これに先立つふたつの幕よりはるかに優れているとみなが認め

① Hertz, *op.cit.*, pp.523-524.

② Attila Csampai und Dietmar Holland, *op.cit.*, SS.116-117.

〔参照〕アッティラ・チャンバイ・ディートマル・ホラント編、前掲、一二六―一二七頁。

③ Hertz, *op.cit.*, pp.525, 527.

ました。しかし、かねて私が懸念したとおり、もともとの歌詞が多過ぎて、その結果音楽も長過ぎます。したがって、イダマンテのARIA（いいえ、私は死を怖れない）を削除します。いずれにしてもそれは場違いの部分です。ただその曲を聴いた人たちは消したのを残念がっています。ラーフ最後のARIAも同様です。それについては一層惜しまれています。しかし、細部に拘らず、大局を見透すべきでしょう。神託の宣告も長過ぎ、これも短縮しました。・・・①

女帝への服喪のため再度延期された歌劇『イドメネオ』は、一七八一年モーツアルトの誕生日である一月二七日に総稽古が、そして謝肉祭の同月二九日にミュンヘン宮廷の（キュヴィリエー劇場）で初演が行われる。父レオポルドは姉ナンネルを伴って一月二五日ザルツブルクを出立した。この新作は一月二九日について二月三日と三月三日に再演された。バイエルン国立図書館に蔵される初演用冊子を抄訳する。

#### 歌劇 イドメネオ

バイエルン選帝侯カール・テオドール様の高配により、

一七八一年謝肉祭において、ミュンヘン新宮廷歌劇場（キュヴィリエー劇場）で上演

脚本 ザルツブルク大司教宮廷礼拝堂主任司祭ジャンバッティスタ・ヴァレスコ

作曲 ザルツブルク大司教宮廷音楽家、ボローニア・アカデミー名誉会員

モーツアルト作曲『歌劇 イドメネオ』

初演 一七八一年一月二九日 ミュンヘン新宮廷歌劇場

指揮 クリステイアン・カンナビヒ

#### 配 役

イドメネオ（クレータの王） テノール ……アントン・ラーフ

イダマンテ（イドメネオの息子） テノール ……ヴィンツェツォデル・プラート

イーリア（トロイア王プリアモスの王女） ソプラノ ……ドロテア・ヴェントリング

エレットラ（アルゴスの王アガメムノンの王女） ソプラノ ……エリザベト・ヴェントリング

アルバーチェ（王の腹心） テノール ……ドメニコ・デ・パンツァッキ

ポセイドンの大祭司 テノール ……ジョヴァンニ・ヴァレージ

天の声（神託）

以上のような製作の経緯によつて歌劇『イドメネオ』の楽譜は複雑である。印刷された冊子としてはヴァレスコの台本を忠実に記載した版本、初演に際してモーツアルトによる改変と短縮を閲したミュンヘン最終稿、さらには一七八六年ウイーンにおける上演のため編まれた改訂稿が存在する。このほかベルリンおよびバイエルンの国立図書館には自筆楽譜や筆者スコアが保存される。これらの資料を検討して音楽学者ハーツは、一九七二年『新モーツアルト全集』の一卷として学問的・批判的楽譜を刊行した。これに依拠して一九七五年ミュンヘンのキュヴィリエ劇場でヴェオルフガング・サヴァリッシュの指揮により、また一九八〇年チューリッヒ歌劇場でニコラウス・アーノンクルの指揮によつて上演がなされ、世界的な『イドメネオ』ルネサンスを覚醒させた。

① Mozart, *Briefe und Aufzeichnungen Gesamtausgabe*. Band III, S.90.

〔参照〕 海老沢敏・高橋英郎編『モーツアルト書簡全集』第四巻。五六七頁。